

## 京都滑稽家列伝

福井純子

### はじめに

トッチントンマの咄珍社<sup>とつほんしゃ</sup>がこの列伝のはじまりである。珍なることを咄して楽しむ集まりなのである。そこに集うのは百一、木葉、錦隣子、雨燕、小文に五新堂という京都の滑稽家たち。この咄珍社の母体となったのが滑稽雑誌『我楽多珍報』である。1872（明治12）年1月17日創刊のこの雑誌は「スタ、ンボンチノ口調を真似トッチントンマの鈍画を添へ」との口上を述べ立てて1880年代前半の京都の街を賑わした。咄珍社ができたのは81年頃。その後咄珍社は『風雅粹誌』『雅楽多』の2誌を創刊し、『京都日報』に「滑稽大同団結酒連会」という文芸欄を作った。これに『文芸倶楽部』を加えると80年代京都滑稽家の遊び場が揃うことになる。列伝をはじめの前に彼らの拠点となったこれらの新聞、雑誌について説明しておくことにしよう。

『我楽多珍報』の創刊はさきに述べたとおり。本誌は83年4月13日第127号まで続いた<sup>1)</sup>。『風雅粹誌』は82年7月創刊。本誌は第1号が東京大学法学部明治新聞雑誌文庫に所蔵。狂歌、狂句を取り集めた雑誌。編集は咄珍社のひとり三浦おいろ。題字は木一庵酔痴、選者は百一以下の滑稽家たち。雨燕は序文にこう記している。

それ風雅は銭なしの負惜しみとなし、粹は身をくふ虫となさは人間何を楽まん。  
風雅なれハこそ月雪も面白く、粹なれハこそ花鳥も楽しけれ。

（句読点筆者、以下同様）

『雅楽多』は89年11月20日創刊、90年4月14日発行の第4号まで東京大学法学部明治新聞雑誌文庫に所蔵。編集発行人吉田保三郎は書店吉田博声堂店主。この吉田博声堂に咄珍社の事務所が置かれている<sup>2)</sup>。本誌は色刷りの表紙がついた贅沢なつくり。第1号の巻頭で「風流社会のヴオーテル、ルーソー」たらんことを望むといい、いたずらに高尚にはしらず、みだりに卑下に陥らぬ「雅俗折衷の風流」を拡充すると宣言

している。トッチントンマから出発した咄珍社にしては随分高尚な物言いである。ところが巻末の社友募集の広告では「色で苦勞の浮世をば、理屈で暮すも粋で無し、政治がどうだの条約が、こうだの摺たの揉んだのと、議論何んぞは他所退け」と、巻頭、巻末で雅俗折衷の手本を見せている。

『文芸倶楽部』は89年2月25日創刊、同年4月15日発行の第2号で廃刊<sup>3)</sup>。国立国会図書館所蔵。発行兼編輯人の中村弥二郎は不詳。発行所は京都の書店便利堂。本誌も雅俗折衷のつくり。詩歌欄には漢詩と狂詩、和歌、俳句と狂歌、狂句が併存する。

『京都日報』は89年3月10日創刊。社説を掲げ、記事には振り仮名を付け、連載小説に挿絵という中新聞。「自由平民主義」を掲げ、特別寄書家に中江兆民、徳富蘇峰等を擁していた<sup>4)</sup>。創刊当初の編集スタッフは梶原保人をはじめ蘇峰の平民社から派遣され、他紙から『国民之友』に似ていると批評される<sup>5)</sup>。兆民の『東雲新聞』とも京都の名物雑誌『活眼』を通して関係が深い<sup>6)</sup>。

さて『我楽多珍報』から『京都日報』まで、さまざまな遊び場をつくった滑稽家たちとはどのようなひとびとであったのか。狂詩、狂歌、狂句に戯画。狂の字、戯の字をあたまにつけて雅の世界を俗臭芬々たる現実に変えてしまうひとびと。この列伝でとりあげるのはいずれも文筆を本業とはしないひとびとである。かれらにはそれぞれ正業がある。滑稽家の正業を探るとは不粋の極みであるが、ともあれ列伝をはじめることしよう。

## 1. 一々庵百一

いささか唐突であるがつぎの歌から始めたい。

君か代の千歳のほかに久しきは御苑の竹のみとりなりけり

これは1886年の歌会始の選歌のひとつである。この年の題は「緑竹年久」<sup>7)</sup>。作者は水莖磐樟。磐樟は本居豊顕、中西石陰に学んだ歌人である<sup>8)</sup>。そしてもう一首。

我駱駝ハ沙漠のはても弘まらん洒落とおどけの夫婦連にて

とうたって『我楽多珍報』に登場したのは滑稽家一々庵百一。この百一は狂詩、狂歌を得意とした。磐樟と百一、同一人物である。

水莖磐樟は神官で、歌人、故実家として知られていた人物である。安政2（1855）年に京都に生まれた。身分は愛知県士族。1907（明治40）年没。父は水莖玉葉<sup>91</sup>。玉葉は二条家家来、皇学所書籍掛、大学校御用掛をつとめ、京都府地誌の編纂に携わった<sup>100</sup>。玉葉の上洛以前の経歴はつかめなかったが、愛知県の神官であったかもしれない<sup>101</sup>。磐樟の神官としての経歴は1875年、奈良県の大神神社権禰宜にはじまる。翌年5月にはすでに同社禰宜に昇進している<sup>102</sup>。以後、78年平野神社主典、87年同社禰宜、95年平安神宮禰宜兼平野神社禰宜、1905年八坂神社禰宜、同年梨木神社禰宜、1906年建勲神社禰宜と京都市内各社の神官を歴任している。歌人としては9点ほどの歌集に磐樟の歌が収められているようだが、いずれも当該歌集を発見することはできなかった<sup>103</sup>。また磐樟個人の歌集の存在も確認できない。

磐樟の故実家としての仕事には『山陵一覧表』の編輯と、平安遷都1100年記念事業への参画がある。『山陵一覧表』は76年11月24日版權免許、77年4月17日刻成、京都の村上勘兵衛から出版された<sup>104</sup>。未定陵を含む全国の山陵を比定し、その所在をまとめた、折本仕立の簡便なガイドブックである。本書には富岡鉄斎が序文をよせている。鉄斎は76年5月、磐樟とおなじ奈良県の石上神社の少官司となっていた。鉄斎自身71年から全国の山陵をめぐっており、76年7月には奈良県内の山陵を巡拝している<sup>105</sup>。序文をいただくには格好の人物である。磐樟は1100年記念事業では3件の仕事を委嘱されている。93年の桓武天皇御事蹟京都市沿革取調、94年の平安通誌編纂、95年の時代行列取調である。3番目の時代行列とは現在の時代祭の行列のこと。この衣装を考証するための委員は6名。磐樟のほか金子錦二、久保田米僊二名の滑稽家が関係していた<sup>106</sup>。滑稽家は故実や考証の周辺に位置していたものらしい。金子錦二は京都の『日出新聞』の演劇、美術など主に文化欄を担当した記者。新潟県出身で『贅言変報』『新潟新聞』の編集長時代に、日本最大の滑稽雑誌『たぐま团团珍聞』の常連投稿家となる。筆名は可猫仙史。『我楽多珍報』にも投稿多数。82年頃大阪の『能弄戯珍誌』幹事、『此花新聞』記者。85年頃『日出新聞』に入社した<sup>107</sup>。久保田米僊は画家。『我楽多珍報』創刊時よりの中心メンバーであり、寝手松の名で戯画を担当した。筆名は草廬舎錦隣子。米僊については後述する。

さて百一である。『我楽多珍報』『風雅粹誌』では狂詩、狂歌の百一生、一々庵百一、滑亭迂史という滑稽家の顔だけでとおしていたが、『文芸倶楽部』『雅楽多』『京都日報』では歌人水莖磐樟としても登場する。誌面にふたつの名前がならぶことも珍しくない。百一が投稿した雑誌はほかに東京の『たぐま团团珍聞』（77年3月創刊）、大阪の『能弄戯珍誌』（81年4月創刊）、和歌山の『かぐま方門珍聞』（81年4月創刊）など。滑稽家

には水莖のような神官、歌人もすくなくない。たとえば本荘宗武こと木一庵醉痴、中川真節こと中坂まとき、山田淳子。彼らは雑誌だけでなく小新聞の常連投稿家でもある。本荘は丹後宮津藩の最後の藩主で籠神社宮司、神宮大宮司。明治10年代は神道事務局の祭神論争にも加わる。20年代には日本国教大道社の副社長、雅学協会の会長にまつりあげられた<sup>18)</sup>。中坂は東京飯田橋中坂で私塾をひらき、根津神社の神官をつとめた<sup>19)</sup>。山田淳子は数少ない女性の全国区の投稿家。播磨の出身で京都の医師山田翠雨と結婚。翠雨は漢詩人梁川星巖の門人であった。夫に儒学を、那須繁仲に国学を学び、頼三樹三郎、太田垣蓮月と親交を結ぶ。夫の死後、神戸女学院の舎監兼和漢学教師となる。その後大阪北浜に和歌の結社梅花社を創設。淳子には9冊ほどの著書があるが、そのうち4冊は唱歌集である<sup>20)</sup>。百一には彼らのような華々しい名声はない。しかし狂詩のアンソロジー『明治太平楽府』に小室世樹、酔多道士ら第一線の滑稽家とかたをならべて収録されるほどの実力の持ち主であった<sup>21)</sup>。『我楽多珍報』関係者として百一ただひとりなのである。

## 2. 木葉散人

神主のつぎは、というわけではないが咄珍社には坊主もいる。木葉散人こと川合梁定は浄土宗黒谷派西正寺18世の住職である。西正寺は北野天満宮の南、下ノ森にある。磐樟が禰宜をつとめていた平野神社から歩いて十分ほどの距離である。木葉散人は戯文、狂詩、狂句にすぐれ、記字窓主人とも称した。川合は多彩な活動をした人物である。経歴、布教、執筆にわけて足跡をたどることにしよう。

川合梁定(1859-1932)は大阪の商家に生まれ、1869年、叔父である西正寺17世堪梁上人に師事した<sup>22)</sup>。70年巖垣月洲に経書を、72年近藤芳介に国典を、74年立華某に英語を、82年同志社のM. L. ゴードンにキリスト教を学ぶ<sup>23)</sup>。僧侶としての歩みは75年、東京深川の靈巖寺で34世梁誉観定上人について得度をしたところからはじまる。翌76年教導職試補、少講義となり、西正寺18世住職に任命された。西正寺住職を99年退隠。1911年から27年までは無住となっていた福井県西福寺の住職をひきうける。いっぽう83年以降本山黒谷金戒光明寺の役職を歴任し、1915年から18年まで管長をつとめる。

梁定の本領は説教師としての活動にある。彼がはじめて説教を行ったのは77年2月、19歳のとき。本格的に説教に巡回するのは92年以降のことである。80年代には破邪演説、仏教銀行設立準備、山陵崇拜会の設立と、近代仏教者としてのさまざまな活

動に手を染めていた。この時期は彼にとって試行錯誤の期間であり、説教者梁定の準備期間といってもよいだろう。92年から1925年までの33年間に梁定が行った説教は9970座。彼の説教を聴いたひとびとは558940人にのぼるといふ。一座の聴聞者は約56人。梁定は鉄道を使い、人力車を雇い、関西のみならず北陸、四国、九州にまで巡教した<sup>24)</sup>。説教の多くは寺院で行われる。説教者と聴聞者との限られた空間である。梁定は寺院に集うひとびとだけでなく、軍隊、工場、監獄、遊郭、病院への布教の必要をといた<sup>25)</sup>。その布教の方法も旧来の説教だけでなくあるいは幻灯をつかい、あるいは芝居仕立てにすることを提案した<sup>26)</sup>。またその場に来ることのできないひとびとのために、パンフレットによる文書布教を実践した<sup>27)</sup>。さらに各地を回る巡教使のありかたについても苦言を呈している<sup>28)</sup>。貧民への関心が深く、医療の分野における慈善活動も彼の布教のなかで大きな位置を占めている<sup>29)</sup>。この主張を実践するために梁定は『卍字叢誌』を創刊した<sup>30)</sup>。第1号の発行は89年8月24日。発行所の卍字会は西正寺におき、発行兼編集人は梁定。本誌の趣意はつぎのとおり<sup>31)</sup>。

徳育慈善の隆盛を図り、童幼婦女に至るまで普く法雨に浴せしめ、兼て家庭教育の一助に供し、又た説教演舌の聴聞に心有るも参聴し能はざる者に読ましめん

彼は卍字会で慈善と幻灯法話に力を入れる。ここでの慈善とは貧民への施療、施薬、医学知識の啓蒙である。卍字会は市内の3軒の病院と提携し、会の発行する施療券をもつ人が治療を受けられるというシステムをつくった<sup>32)</sup>。幻灯法話は幻灯の機械を持って梁定が出張法話するというもの<sup>33)</sup>。本誌は不定期ながら第15号(91年3月5日)まで続いた。廃刊の理由は第15号巻頭の論説「衆議院議員は十善戒を受く可し」が出版条例に抵触したことによる。無署名だが編輯長川合の筆と考えてよい。この論説ではまず衆議院議員を「許多の點頭と許多の散財」とによって獲得した身分だとからかう。そして不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十善戒をつきつけるのである。戯文めかした書き方ながら筆鋒は鋭い。

廃刊後も梁定は終生仏教雑誌に記事を書きつづけた。彼の執筆が確認できる雑誌は『第二仏教新運動』『仏教公論』『宗粋』(のち『宗粋雑誌』と改題)『法幢』『宗粋法話』『宗教界』の六誌。彼の自筆資料には『浄土教報』『興隆仏法会雑誌』『紫雲』『華頂』の名前があるが、残存状況が悪く確認できなかった。このほか79年には西京浄土宗沙門禅誉の名前で『明教新誌』に3回投稿している<sup>34)</sup>。『明教新誌』は啓蒙思想家

大内青巒が75年に創刊した仏教誌。『第二仏教新運動』は悟真協会編輯<sup>35)</sup>。89年11月創刊か。梁定は第4号(90年2月)に「団洲熱」、第13号(90年10月)に「本山住職等ハ皆馬鹿なり」、第15号(90年12月)に「無仏世界?無僧世界=無教国?不教国」を書いている。いずれも卍字窓主人。本誌には『卍字叢誌』の広告がある。『仏教公論』は92年3月創刊<sup>36)</sup>。この雑誌は『第二仏教新運動』の悟真協会と仏眼会、仏教新運動毘婆沙が合併したものらしい<sup>37)</sup>。『第二仏教新運動』も『仏教公論』もどちらも浄土宗学京都支校に事務所が置かれている。『仏教公論』の発行人は、当時浄土宗の民党と呼ばれたグループのリーダー吉岡呵成<sup>38)</sup>。吉岡は近代浄土宗において布教伝道の端緒を開いた人物である。梁定は吉岡と行動をとる。『仏教公論』には第36号(93年9月)で廃刊となるまで、本名もしくは卍字窓主人の名で巡教の紀行文や小説を書いている。『宗粹』は97年2月創刊<sup>39)</sup>。本誌は浄土宗民党の牙城と目された。本誌から川合の俳句時評が始まる。この俳評は雑誌を変えながら終生続く。『宗粹』には毎号のように川合の名前がある。本名、卍字窓主人、敲門瓦子、松隠居、卍翁の筆名を使い分けて一号に複数の記事を書くことも珍しくない。本誌の記事が一冊の布教本となることもあった。『信徒家訓』『二世の枝折』などである。文書布教の実践の場である。ほかに20冊ほどの布教本がある<sup>40)</sup>。『法幢』は浄土布教交話会の編輯発行<sup>41)</sup>。97年11月創刊。川合は第1号の巻頭に発行詞に換えるものとして論説「教界時言」を書いている。『宗粹法話』は98年1月創刊<sup>42)</sup>。『宗粹』は僧侶を対象とした専門誌、『宗粹法話』は信徒を対象とした啓蒙誌である。本誌では滑稽家木葉散人の姿が見えかくれする。さきに川合が布教の手段として芝居仕立てにすることを説いたと記した。本誌ではその脚本が新狂言という名前で登場する。また高僧伝や経典の解説、信徒の修養心得など、他誌には見られない記事が多い。本誌には亡くなる直前の1932年3月まで執筆している。最後の記事は「降誕記念として胎教の勧め」であった。『宗教界』は1905年9月創刊<sup>43)</sup>。本誌は学術雑誌の性格が強く、川合とは相いれない。1911年11月で執筆が終わる。本誌には時評俳句、紀行文、新狂言のほか仏教史の論文「勅修伝記載京都及び其附近に於ける旧蹟考」を書いた。

そこで木葉散人である。百一が人情、風俗をうがつのを得意としたのに対し、木葉散人はストレートに政治、社会を諷刺する。

#### 地方官会議

大鯰中鯰髯又髯。集来三府三十髯。或小田原亦虚口。正面議長独撫髯。

(『我楽多珍報』第30号 80年2月20日)

一夫一婦

可憐女子権未伸。建白種々理屈煩。採用予知無覚束。廟堂多是数婦人。

(『京都日報』89年7月14日)

右の「大鯰中鯰」とは官吏のこと。ヒゲを生やした官吏を鯰に見立ててからかっている。木葉散人には狂詩、狂歌だけでなく『滑稽道中 地獄伝信記』『浄瑠璃一口天狗』『滑稽奇談 夢の浮橋』『素人天狗』『素人浄瑠璃 天狗の大よせ』といった戯作もある<sup>44)</sup>。いずれも85年から89年にかけて出版された。『滑稽道中 地獄伝信記』は82年和歌山の『方円珍聞』に連載したものの。「火の車に乗て地獄へ出立」にはじまり「閻魔の庁より賞状を賜ふ」で大団円となるホラ話である。落語の「地獄八景」をおもわせるつくりになっている。本書には百一の序文と錦隣子の挿絵がそえられている。『滑稽奇談 夢の浮橋』は小野小町に平清盛、佐倉宗吾にいたるまで日本史上の有名人が、オールスターキャストでドタバタをくりひろげる。佐倉宗吾が諸国人民の目の前で自由の鐘を打ち鳴らすと、それを見ていた京都人は「戦争みたいな事せんかテ糸くりでもしてお見……三銭や四銭のお銭は儲かるのに」と卑屈の極みのたわごと。これは木葉散人が見るところの京都人の姿である。80年代の京都で滑稽家木葉散人は悪口の限りを尽くしたのである<sup>45)</sup>。

### 3. 草廼舎錦隣子

錦小路のとなりに住んでいたから錦隣子なのだそうである<sup>46)</sup>。錦隣子の『我楽多珍報』初おめみえは端唄である。

ひじ枕 本調子

更けゆくに独りかり寝のひちまくら

まどもる風の身にしみて二こゑ三声雁の音つれ

(『我楽多珍報』第2号 79年1月24日)

錦隣子は咄珍社のお抱え絵師、久保田米僊(1852-1906)の文筆の号である<sup>47)</sup>。米僊は明治10年代沈滞していた京都の画界を復興すべく画学校の設立を建議し、内国博覧会の意義を説き、京都青年絵画研究所を設立した。彼は東京の書画会に赴き、名古屋に画塾を開き、89年の巴里万博に出掛けた。東奔西走の80年代であったが、そのあ

いまには滑稽家錦隣子として都々逸や狂句をよみ、89年には雑誌『美術』を創刊した<sup>48)</sup>。パリ行の見聞録を『京都日報』に連載し、『米僊漫遊画乗』を出版した<sup>49)</sup>。海外渡航はさらに続く。93年にはシカゴ万博を取材して『閣龍世界博覧会美術品画譜』を出し<sup>50)</sup>、94年には日清戦争の従軍画家として朝鮮にわたった。このときの産物が『日清戦闘画報』である<sup>51)</sup>。この間、彼は弟子の岡本逍遙を介して徳富蘇峰と知り合い、90年国民新聞社に入社<sup>52)</sup>。東京では幸堂得知ら根岸派の文人たちとの交際が始まった。

その東京移住の直前、彼は京都美術協会の設立に奔走していた。この協会は89年12月6日に発議され、席上発起人総代の米僊はつぎのようにその趣旨を述べた<sup>53)</sup>。

歐羅巴にて東洋の美術として愛玩するハ吾日本に在り。而して日本の美術ハ吾京都に在り。  
(中略) 此地に一の美術研究所の如きものを組織し、各種個々の研究より広く美術の研究を  
なし以て吾京都の美術を海外に輝さんとす。

12月17日に規則案などを作成し、翌年1月9日発会式が行われた<sup>54)</sup>。米僊が京都を出発したのは13日である。会を構成するのは美術工芸家と商工業者。米僊は幹事におさまり、のちに時代行列の考証をする金子錦二が常置委員。糸商児島定七が評議委員に名を連ねている<sup>55)</sup>。児島は『京都日報』の株主のひとりであり、柳条生の号を持つ<sup>56)</sup>。彼の著書『京都策』(90年4月)は名勝保存、旅客吸収、美術工芸を振興の柱にしようというもの<sup>57)</sup>。美術工芸を振興策のひとつとするのは、京都の商工業が美術工芸を源泉とするからだと柳条生はいう。米僊は美術工芸の改良進歩に重きを置いていたが、糸商柳条生にとって美術工芸は京都の地場産業なのである。

同じ89年の歳末、米僊にはシェイクスピア劇や痴遊懇親会という場所も用意されていた。12月9日、四条南劇場で催された「セキスピア演芸会」は、演劇改良の実験が計画だおれに終わってしまったというしろものである<sup>58)</sup>。ここで演じられたシェイクスピア劇は「人肉質入レ裁判」。計画会の席上米僊は、高尚優美を旨とし衣装はフロックコート、鳴り物は楽隊にしたいと希望を述べていた。米僊は演劇改良論者なのである。彼の演劇改良の試みは、85年に金子錦二らと劇評家のグループをつくるころからはじまる<sup>59)</sup>。これは東京や大阪の劇評家の連をまねたもの。翌年には大阪の演劇改良会に参加し、89年11月大阪角座の芝居では故実を調べ衣装を担当した<sup>60)</sup>。上京後も『国民新聞』や雑誌『歌舞伎』で劇評をし、1902年1月市村座の伊井蓉峰一座の芝居「玉篋両浦島」の大道具、小道具、衣装を担当する<sup>61)</sup>。痴遊懇親会というのは12



月14日、円山正阿弥楼で開かれた演芸会である<sup>62</sup>。出演は講釈師尾崎北海、山崎琴書、落語家桂文明、桂文屋。加えて錦隣子、木葉散人、五新堂に小文の咄珍社の面々。小文のだしものは「清朝人演説」。かたことの日本語で笑いを取ったのだろうか。滑稽家は演芸の世界にも顔を出すのである。上方の桂文之助が二代目曾呂利新左衛門と改名したのは86年のこと。この改名は錦隣子、木葉散人等の提案によるものだという<sup>63</sup>。

米僊の故実、時代考証の仕事は演劇改良、時代行列にとどまるものではない。本業においては歴史画、錦隣子では考証癖としてあらわれる。歴史画はともかく、錦隣子の考証癖は『我楽多珍報』第42号（80年5月28日）の「古今芸林小言」にはじまり、『雅楽多』第1号、第2号の「反古箱」、『国民新聞』の「土蔵」（91年1月28日）や「菓子」（91年2月15日）、『新小説』の「大原女」（1903年9月）、「婦人の帽子」（1906年7月）など枚挙に暇がない。ちなみに「婦人の帽子」は米僊の遺筆である。端唄、都々逸の錦隣子のなかで故実、考証の世界がふくらんだ。

#### 4. 花笠雨燕

咄珍社のなかで花笠雨燕はビッグスターなのかもしれない。82年3月、咄珍社一同が京都に仮名垣魯文を迎えたとき、魯文と面識があったのは雨燕ひとりだった<sup>64</sup>。雨燕は滑稽の親玉仮名垣魯文のもとから出発したのである。雨燕のデビューは『魯文珍報』第6号（78年1月31日）<sup>65</sup>。『魯文珍報』は滑稽界のつわものをずらりそろえた大舞台である。その後高島屋塘雨の『珍笑新誌』に河岸をかえ、創刊から第7号まで毎号雨燕の戯文が誌面を飾ることになる<sup>66</sup>。この花笠雨燕という男、じつは軍人なのである。

本名は出羽実智（1844－1909）。萩藩土山県吉之助の次男に生まれ、出羽実義の養子となる。軍人としての経歴はつぎのとおりである<sup>67</sup>。71年12月陸軍少尉に任官、72年5月3日陸軍中尉となり近衛五番大隊附を命ぜられる。以後、73年2月近衛歩兵第二大隊二番小隊附、73年12月近衛歩兵第二大隊第一中隊附、77年西南戦争に従軍し負傷、78年1月28日近衛歩兵第一連隊第一大隊第三中隊長、78年10月3日大阪鎮台歩兵第九連隊第一大隊第四中隊長（大津當所）、79年3月20日大阪鎮台歩兵第九連隊第三大隊第二中隊長（伏見當所）、85年6月5日名古屋鎮台歩兵第十九連隊第一大隊第一中隊長（名古屋當所）、87年11月16日陸軍歩兵少佐、87年11月17日仙台鎮台歩兵第四連隊附、88年11月17日歩兵第十六連隊第一大隊長（新潟）、91年7月27日新発田大隊

区司令官をへて、92年1月9日予備役に編入。94年8月から95年7月まで日清戦争に従軍。退役後は新潟に暮らし事業に従事した。

実智に大津赴任の辞令が出たのは近衛兵の反乱、竹橋事件の直後である<sup>68)</sup>。この人事異動と事件との関係は不明。大津に赴任してまもなく我楽珍のメンバーとの交際が始まった<sup>69)</sup>。雨燕の名前が『我楽多珍報』に初めて出たのは第54号（80年11月12日）。狂詩、狂句、戯文を得意とした。彼の狂詩をひとつ<sup>70)</sup>。

#### 偶成

神祇釈教恋無情。人世恰是如劇場。地球舞台天棧敷。迅雷風雨囃子方。億兆蒼生皆役者。或作臣妾或君王。上施暴政国忽亡。下企姦惡人遂縛。作者妙案雖可感。只恨常多騷動幕。

第96号から連載を始めた「摺雲録」は張良や弁慶、桃太郎ら和漢の暴れん坊が王家を再興するほら話。その稟告にいう<sup>71)</sup>。

子ノ玉ニ曰ク、悉ク書ヲ信ゼバ書ナキニ如ズト。不佞腹中一文ノ貯ナクシテ舌頭無量ノ法螺ヲ吹ク。之ヲ筆頭ニ移シテ出放題ニ引書廻スコト、皆嘘ナラザルハ無シ。

82年3月には『古聞新報』の編集をはじめ、4月には雑誌『<sup>はなかくでどうしゅうすごろく</sup>破墮可伝同臭芻語録』の発行を計画する<sup>72)</sup>。『古聞新報』は滑稽の詩歌を雑誌風に編集したもので、希望者には送料のみで送付。『破墮可伝同臭芻語録』は咄珍社の面々を引き入れようという計画。陸軍中尉の道楽である。この陸軍中尉の道楽は滑稽の遊びばかりではない。まっとうな漢詩も作れば、絵も描く。漢詩のときは春城と号した。春城は日清戦争の陣中で同行の日本の軍人と詩歌を詠み、朝鮮の官吏と漢詩を交換していた<sup>73)</sup>。聞慶の兵站部にあった彼は紅葉狩りにでかけ

遠在後當無寸功。詩瓢豈忍賞山楓。幾多戰友歿前陣。鮮血紅於霜葉紅。

と詠んでいる。新潟でも同好の士と風吟社というグループをつくって詩歌の回覧雑誌をつくっている<sup>74)</sup>。彼はまたは多くの画稿を残している<sup>75)</sup>。京都を離れても米僊との交際が続いていたのは絵を通じての関係であったのかもしれない<sup>76)</sup>。実智の墓所は出羽家の菩提寺、萩市江向の徳隣寺にある。

## 5. 五新堂, 虎屋町小文

列伝の最後をしめくくるのは咄珍社の大物ふたり、五新堂と小文である。どちらも狂歌、狂句、都々逸を得意とした。

親方は兎角に乳母のしなに惚れ  
しめしまいらせ書玉章かくたまずさの墨にも有ぞへ濃薄き

五新堂  
小文

(以上, 『我楽多珍報』第5号 79年2月21日)

五新堂の狂句は琉球処分の沖繩の立場を皮肉ったもの。「親方」は琉球王朝, 「しな」は支那である。小文の都々逸は爛々たる世界をうたい, 人気を博したという。五新堂は時事で味付けしたものが多。小文は創刊から, 五新堂は第5号からの『我楽多珍報』常連の投稿家であり, ともに市井の商人であった。まずは五新堂からはじめよう。

五新堂は咄珍社の幹事。咄珍社の社名は一時『雅楽多』の吉田保三郎に譲られていた。五新堂のもとに戻ったのは90年7月10日のこと<sup>77)</sup>。滑稽大同団結酒連会をしかけたのも五新堂である。酒連会では「各々本業ノ余暇大ニ滑稽ヲ談笑シ又ハ詩歌ヲ吟詠シ, 以テ心事ノ鬱結ヲ安慰スル」と規約にうたっていた<sup>78)</sup>。百一は五新堂を評して「情事探訪独自誇。粹筆評柳又品花。新地艶聞嗅附否。先生隆鼻向東斜。」と吟じた<sup>79)</sup>。五新堂は五条新町東入ルの古着商木村与三郎である<sup>80)</sup>。木村は下京古着商組合の組合長や商人倶楽部代表など, 実業界で活動した<sup>81)</sup>。商人倶楽部は反公民会, 反浜岡光哲の路線で90年6月1日発足<sup>82)</sup>。これは同年7月1日の衆議院議員選挙をにらんだものである。公民会は京都の名望家を糾合した政治団体で, 浜岡の経営する『中外電報』『日出新聞』が同調していた。選挙は公民会の圧勝に終わる。商人倶楽部の開館式では発起人総代である木村の演説や賛同者の祝辞のほか, 小文が抹茶席で接待をした。倶楽部の活動は商法研究会と新聞縦覧所というが, 研究会の実体は不明<sup>83)</sup>。新聞縦覧所には『京都日報』をはじめ児島定七の『京都策』, 『卍字叢誌』, 『雅楽多』, 『仏教新運動』など咄珍社の面々と関係の深い図書や雑誌が集められていた。新聞縦覧所の広告は90年6月から7月にかけて『京都日報』に集中的に掲載される。商人倶楽部に対抗して公民会は商法講義会を催す<sup>84)</sup>。この商法講義会を『京都日報』は浜岡の提灯持ちと酷評する。木村はその後『琵琶湖疎水要誌』(若松雅太郎と共編, 京都市参事会, 90年-95年, 96年訂二版), 『京都市例規全書』(西堀徳二郎と共編, 京都市参

事会、94年)の編集に携わる<sup>85)</sup>。

虎屋町とは京都烏丸姉小路上ルの町名。小文、本名宮田保次郎は虎屋町にある紅花商西村屋小杉清左衛門の奉公人文七であった<sup>86)</sup>。小杉の文七だから小文。保次郎は越前鯖江の出身で、64年に13歳で上洛したという。嘉永5年(1852)の生まれか。小文の投稿は京都の小新聞『西京新聞』(77年1月創刊)、『团团珍聞』からはじまる。80年12月には『我楽多珍報』の同人楫東正彦らと四条烏丸に新聞縦覧所を開設<sup>87)</sup>。手元の新聞を有料で客に読ませようという計画であろう<sup>88)</sup>。この新聞縦覧所のその後は不明。西村屋から81年12月に暇をもらい、西陣一条戻り橋近くでかつぎ呉服屋をはじめ<sup>89)</sup>。『文芸倶楽部』以後は転庵小文の名前を使う。転庵小文とはいわずらもの、わるふざけの小文という趣向である。93年、京都市は名勝保存をうたって円山公園の西行庵再興をはかる<sup>90)</sup>。西行庵は西行終焉の地に頓阿法師が庵を結んだと伝えられる旧跡である。これに小文はのった。富岡鉄斎は「東山西行庵再建文」を書いて再建資金の勧進に協力した。この「再建文」は『仏教公論』第35号(93年8月25日)、『京都美術協会雑誌』第15号(93年8月28日)にも掲載された。小文は川合梁定に得度をうけ、梁定のふたりめの弟子となった<sup>91)</sup>。以後、彼は西行庵小文、小文法師を名のる。西行庵の売茶翁小文法師は円山公園の名物であった<sup>92)</sup>。1902年には関西初の活人画に金子錦二とともに出演した<sup>93)</sup>。小文のだしものは「鰯丸」、金子は「斎藤実盛」。小文が亡くなったのは1929年10月13日。彼は西行、頓阿のあとを襲った庵主としての辞世を用意していた<sup>94)</sup>。

きさらぎの花の下より鼻の下餅つきまでと思ひしものを  
もみち葉のてるをも待たてチリテントンシャンシャンと西へ行き候

人情をうがつもの、時事に敏感なもの、ホラ話を好むもの、咄珍社にはさまざまな滑稽家が集っていた。職業も神官、僧侶、画家、軍人、商人と多岐にわたっていた。ひといろで括れない集団である。咄珍社は滑稽をよりどころにさまざまなひとびとを交錯させた。しかし文芸の好尚は滑稽から風雅へと移り、咄珍社はいつともなく消えた。咄珍社にはじまる列伝はこれでおしまいである。

#### 注

- 1) 詳細は拙稿「明治のコミック・ペーパー『我楽多珍報』」(西川長夫・松宮秀治編『幕

- 末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社 1995年)。
- 2) 『京都日報』89年9月20日『雅楽多』広告に「御幸町五条上ル吉田博声堂内咄珍社」とある。
  - 3) 『日出新聞』89年6月17日に便利堂が「文芸倶楽部」を第2号で廃刊する旨の広告を出している。
  - 4) 「自由平民主義」は『京都日報』89年3月10日社説「京都日報」で宣言し、特別寄書家は『日出新聞』『東雲新聞』等に出した創刊広告で発表している。特別寄書家はほかに吉田熹六、田口卯吉、朝比奈知泉、渡辺治、高橋五郎、伴直之介、客員に石橋忍月。『京都日報』は京都府立総合資料館所蔵マイクロフィルム。3月17日、19日、22日の3回にわたって19紙の批評を掲載した。各紙とも蘇峰との関係を重視し、『毎日新聞』『中外電報』は『国民之友』との類似を指摘している。
  - 5) 梶原は89年9月10日付で上京の広告を『京都日報』に出している。この退社の原因について『日出新聞』は、京都日報の株主が非条約改正説をとり梶原と対立したからだとして報じている。
  - 6) 『活眼』は出せばすぐに発行停止処分を受ける京都の雑誌。東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵。『一大活眼』は89年6月7日発行。その後処分を受けるたびに『二大活眼』『第三活眼』『第四活眼』『第五活眼』と名前を変えながら90年4月まで続いた。89年秋、日刊新聞『活眼』発行の計画に兆民が関係したと言われている。『第四活眼』の印刷所は東雲新聞社、『第五活眼』の挿画には東雲の藤原信一が加わっている。『活眼』の編集にあたったのはのちに壮士芝居の役者となる藤沢浅次郎。89年5月から11月まで『京都日報』『東雲新聞』には『活眼』関係記事が多い。
  - 7) 恒川平一『御所歌の研究』選歴記念出版会 1939年。
  - 8) 日本文学資料研究会編『国学者伝記集成』続 名著刊行会 1972年。以下、水莖の経歴について特に断らないものは本書による。
  - 9) 森繁夫編、中野莊次補訂『名家伝記資料集成』思文閣出版 1984年。
  - 10) 「堂上地下入学名簿」「大学校職員総名簿」(以上、宮内庁書陵部所蔵)。「京都府史」第一編官員履歴11、「京都府職員録」(以上、京都府立総合資料館所蔵)。
  - 11) 後述の『山陵一覽表』奥付によると水莖の身分は「愛知県士族田島仲道附籍愛知県士族大神神社禰宜兼権訓導」となっている。この田島仲道も尾張中島郡片原一色村の世襲の神官であるという(前掲『名家伝記資料集成』)。
  - 12) 前掲『山陵一覽表』凡例。この日付は明治9年5月となっている。
  - 13) 前掲『名家伝記資料集成』には『類題秋草集初編』『昔の春』『さみたれ集』『明治勅題歌集』『清蘆余事』『八千代の椿』『称寿集』『妙見山十勝』『千代の白菊』の9冊のタイトルが記されている。
  - 14) 国立国会図書館所蔵。
  - 15) 「富岡鉄斎年譜」(『生誕150年記念 富岡鉄斎展目録』京都新聞社 1985年)。
  - 16) 委員の名前と担当はつぎのとおり(「平安神宮時代祭縁起及行列明細記』『日出新聞』1895年10月22日)。出雲路興通 前列、碓井小三郎 第一列延暦文官参朝式、今泉雄作

第二列延暦武官出陣式、水基磐樺 第三列藤原文官参朝の事、金子錦二 第四列城南流鏑馬の事、第六列徳川上使上洛式、久保田米僊 第五列織田公上洛式。

- 17) 宮武外骨、西田長寿『明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房 1985年。
- 18) 前掲『名家伝記資料集成』。藤井貞文『明治国学発生史の研究』。日本国教大道社は社長烏尾小弥太、本荘と山岡鉄舟が発起人に名をつらねる。神儒仏の合同で国家精神の発揚をはかるという古典的国家主義団体。実際の入会者は僧侶が多い。88年7月25日機関誌『日本国教大道叢誌』創刊。本荘は名前を貸しただけの関係であるらしく、第18号(89年12月25日)に演説筆記「時機方到来」があるのみ。本誌は大谷大学図書館所蔵。雅学協会は90年9月12日『雅人』創刊。本紙は雅俗折衷の文芸雑誌。発行兼編輯人は菟道春千代。金子錦二をはじめ明治10年代から活躍した滑稽家が顧問となっている。大道社とことなり、こちらは協会の事務所を東京の自宅に置くなど本荘の熱意のほどがうかがえる。本誌には松濤庵煙雨の筆名で短いものをいくつか寄せている。ちなみに発行兼編輯人の菟道春千代も歌人で唱歌集を編んでいる。菟道は大阪出身で山田淳子との共著もある。本荘に菟道を紹介したのは淳子かもしれない。本誌は国立国会図書館所蔵。
- 19) 梅本塵山「明治の投書家」(『本道楽』第108号 1935年4月1日)。
- 20) 大阪市東区編『東区史』第5巻人物編 初版1939年、復刻清文堂 1982年。『神戸女学院五〇年史』。淳子の編著書はつぎのとおり。『よし野のつと』『小学生徒運動歌』『小学校幼稚園生徒修身運動歌』『明治改正新撰唱歌集』『幼児教訓唱歌』『あつまのつと』『環翠遺草』『花のいさお』『山田淳子歌集』。国立国会図書館ならびに大阪天満宮所蔵。
- 21) 『明治太平楽府』は全三編。榊原英吉編、画、発行。発行地は大阪、1880年。大阪天満宮所蔵。百一作品が収録されているのは第二編。タイトルは「艶書」「纏頭」「藪医」。そのひとつを掲げる。

#### 艶書

こいしきそれさまこがるたれ ひとみでしめしそろかしくのじ  
恋敷某様欽慕誰。短筆示候可祝辞。堪し憐下女一不し読。或披或巻独焦し思。

- 22) 川合梁定自筆資料「経歴 年譜 附戸籍原本」西正寺所蔵。以下、特に断らない限り川合の履歴については本資料による。
- 23) 巖垣月洲については『国書人名辞典』第1巻(岩波書店 1993年)、『学習院史』(学習院編 1928年)参照。近藤芳介は歌人、神官で芳樹の養子。近藤芳樹については前掲『国書人名辞典』第2巻参照。ゴードンについては竹中正夫「排耶論にこたえた宣教師たち」(同志社大学人文科学研究所編『排耶論の研究』1989年)参照。
- 24) 梁定の巡教をすべて追うことはできないが、その紀行文はつぎのとおり。  
「遊江雑記」2-4, 6 滋賀 『仏教公論』第1号-第3号, 第6号(92年3月, 4月, 6月)  
「さゝなみ日記」上, 中, 下 滋賀 同前第16号, 第18号(92年11月, 12月)  
「行脚帳」岐阜 『宗粋法話』第1巻第10号(98年10月)  
「しらぬ火紀行」全四回 熊本 同前第4巻第5号-第8号(1901年5月-8月)  
「北越遊記」全3回 福井, 石川 同前第4巻9号, 第10号, 第12号(1901年9月,

- 10月, 12月)  
 「伊予紀行」全4回 愛媛 同前第5巻第6号—第9号 (1902年6月—9月)  
 「鉄路悠々」上, 下 九州 『宗教界』第6巻第6号, 第7号 (1910年6月, 7月)  
 「飛沫」下 四国 『宗粋法話』第17巻第2号 (1913年2月)。
- 25) 川合梁定「教界時言」『法幢』第1号 (97年11月), 無署名「七条新地の伝道」『宗粋法話』第5巻第11号 (1902年11月) など。
- 26) 無署名「幻灯法話」『卍字叢誌』第11号 (90年7月), 卍翁「残月暁風」『宗粋』第44号 (1900年9月) など。
- 27) 川合梁定「文書の布教」『宗粋』第18号 (98年7月) など。
- 28) 卍窓「布教制度について」『宗粋』第5号 (97年6月), 無署名「布教の主義方針を確立せよ」『宗粋雑誌』第6巻第6号 (1902年6月) など。
- 29) 川合梁定「貧民窟の実況」『宗粋』第9号, 第10号 (97年10月, 11月), 卍翁「柳緑花紅」『宗教界』第2巻第2号 (1906年2月) など。
- 30) 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫, 慶応大学斯道文庫所蔵。
- 31) 『京都日報』89年8月28日付。
- 32) 『京都日報』89年10月15日付「卍字会施療施薬所」広告, 『卍字叢誌』第6号 (90年2月1日)「歯痛施療」広告。
- 33) 前掲『卍字叢誌』第11号「幻灯法話無謝儀にて出演の依頼に応ず」。
- 34) 佛教学部所蔵マイクロフィルム。梁定の投稿は第773号, 第819号, 第832号 (97年2月26日, 同年6月4日, 同年6月30日) に掲載。投書はいずれも無題, 内容は僧侶, 仏教者としての在り方を問うものである。
- 35) 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵。
- 36) 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫, 慶応大学斯道文庫所蔵。
- 37) 『仏教公論』第1号社告。
- 38) 吉岡については「浄土宗仏家人名辞典 近代篇」(大橋俊雄著 東洋文化出版 1981年), 「浄土宗近代100年史年表」(大橋俊雄著 東洋文化出版 1987年) 参照。
- 39) 佛教学部所蔵。
- 40) 前掲川合梁定自筆資料「経歴 年譜 附戸籍原本」によるとつぎのとおり。  
 「二世安楽」『女子の宝』『御親論義解』『慈悲のみかげ』『義勇奉公』『うらぼん』  
 『をしへ草』『菅公と仏教』『菅公の信念』『年中行事』『活人剣』『留守の心得』『戦時  
 国民の注意』『戦時信徒の注意』『宗祖大師遺跡案内記』『宗祖大師御伝記』『宗祖大  
 師嘆徳和讃』『脚本法然上人』『宝の山』『先帝御遺訓』。このほか『法乃絵草紙』が  
 ある。『宗祖大師御伝記』『脚本法然上人』『法乃絵草紙』は国立国会図書館所蔵。
- 41) 慶応大学斯道文庫所蔵。
- 42) 佛教学部所蔵。
- 43) 佛教学部所蔵。
- 44) いずれも国立国会図書館所蔵。戯作のほか梁定には『旧約全書不可信論』(出版人布部常七 京都 82年)がある。これは破邪演説の産物である。

- 45) 『京都日報』89年6月22日に木葉散人の狂詩「病中吟四首」がある。このなかで平生の悪口がたたって頬がはれてしまったとなげいている。悪口は木葉散人の売り物だったのである。
- 46) 久保田米僊「作家画伯雅号由来」『新小説』第2巻第9号(97年8月)。
- 47) 米僊の経歴については黒田譲著作兼発行『名家歴訪録』上編(99年)、『米僊画談』(松邑三松堂 1902年)。画家としての経歴については兵庫県立近代美術館、神奈川県立近代美術館編『描かれた歴史』展図録(1993年)の作家略歴参照。
- 48) 前掲『文芸倶楽部』第一号に広告がある。本誌の創刊は89年の早い時期であるらしい。米僊のバリ出発後は門人の岡田猶吉が編集を担当する予定と報じられた(『美術園』第2号 89年3月5日)。
- 49) 『京都日報』には「欧州渡航画報」「巴里随見録」「遭難記事」「帰航画報」を89年3月24日から10月24日まで不定期に連載。「米僊漫遊画乗」は第1巻が89年12月、第2巻が90年4月発行。
- 50) 本書は全4巻、大倉書店より93年、94年にかけて出版された。
- 51) 本書は全11巻、大倉書店より94年、95年にかけて出版された。
- 52) 前掲『名家歴訪録』上編参照。なお岡本逍遙は三条の旅館萬屋の主人、橘泉の号もある。米僊と国民新聞社との関係については有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』(吉川弘文館 1992年)第1章、第2章参照。
- 53) 『京都日報』89年12月8日「美術家懇親会」。
- 54) 『京都日報』89年12月18日「美術協会」、『京都美術協会雑誌』第1号(90年10月5日)。
- 55) 前掲『京都美術協会雑誌』第1号。
- 56) 『京都日報』89年3月10日付録に柳条生「京都日報は如何なる新聞なるや」がある。柳条生こと児島は本紙に多くの記事を書いている。号の由来は児島の店が柳馬場四条にあったことによる。
- 57) 国立国会図書館所蔵。
- 58) 『京都日報』89年11月21日、22日、26日、12月6日、7日、10日、11日、17日など。
- 59) 『日出新聞』85年5月28日。
- 60) 『大阪日報』86年10月12日。伊原俊郎著、河竹繁俊編『歌舞伎年表』第7巻。
- 61) 前掲『歌舞伎年表』第7巻。
- 62) 『京都日報』89年12月7日、10日、17日。
- 63) 橋本礼一「『古今東西 落語家事典』補訂考証」(『芸能懇話』第4号 1991年)、倉田喜弘、藤波隆之編『日本芸能人名事典』(三省堂 1995年)。
- 64) 『此花新聞』82年3月29日「案内の杖」。本紙は東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵。
- 65) 『魯文珍報』への掲載はほかに第9号、第10号(78年3月上浣、3月18日)。本誌はマイクロフィルム。
- 66) 『珍笑新誌』は78年6月30日創刊。本誌は東京大学法学部明治新聞雑誌文庫、立命館大学所蔵。
- 67) 出羽の経歴については山口県文書館所蔵出羽家文書の辞令、「出羽家文書写真帳」「出



- 羽家古文書抄」「貫通銃創景状書」「従軍私録」および「陸軍職員録」（国立公文書館所蔵）による。
- 68) 『珍笑新誌』第5号（78年9月21日）に事件をネタにした地口「竹橋の分取品」（古和井琴太）、狂詩「竹橋異事」（王蘭坊）がある。
- 69) 川合は『仏教公論』第27号（83年4月25日）につきのような出羽の俳句を記している。この句は天津での正月の句である。川合はこの記事の中で「明治13年」と書いているが、出羽の経歴によるとこれは12年の誤りである。  
水海を真一文字や初日の出
- 70) 『我楽多珍報』第78号（81年9月9日）。
- 71) 『我楽多珍報』第93号（81年12月23日）。
- 72) 『我楽多珍報』第102号（82年3月3日）、第109号（82年4月28日）。『西京新聞』82年4月13日）京都府立総合資料館所蔵マイクロフィルム）。
- 73) 前掲「従軍私録」。
- 74) 「風月吟集」（前掲出羽家文書）。
- 75) 出羽家文書には340番、346番、348番の画稿がある。
- 76) 前掲「従軍私録」によると開慶兵站部の出羽と従軍画家久保田米僊とのあいだで手紙がやり取りされている（94年8月24日条、10月27日条、10月31日条）。また出羽家文書335番の手帳の住所録には米僊の東京の住所が記されている。
- 77) 『京都日報』90年7月10日「咄珍社広告」。
- 78) 『京都日報』89年5月28日「滑稽大同団結酒連会」広告。
- 79) 『京都日報』89年7月14日「滑稽大同団結酒連会」欄。
- 80) 『此花新聞』82年3月29日「案内の杖」に「五新堂〔木村与三郎〕」とある。
- 81) 『京都日報』89年4月14日「組合解散広告」、90年6月3日「商人倶楽部開館式」。
- 82) 前掲「商人倶楽部開館式」。
- 83) 『京都日報』90年6月4日「商法研究会広告」。新聞縦覧所の広告は6月3日からはじまる。
- 84) 『京都日報』90年6月11日「商法講義会」。
- 85) 国立国会図書館、京都府立総合資料館所蔵。
- 86) 小文の経歴については有斐尼「小文法師」（『文芸倶楽部 定期増刊 明治畸人伝』1906年4月）、桜木花雪「西行庵小文法師」（『本道楽』第50号 1930年6月1日）参照。
- 87) 『魁新聞』80年12月28日。
- 88) 小文は投稿家に多い新聞好きである。『西京新聞』77年9月13日「寄書」欄につきのようにかいている。  
僕も今迄は日々五六葉の新聞を乞来やしたがどふやら新聞で財布が烏丸となりそふだから以後は貴社一葉ときめておくよ
- 89) 『我楽多珍報』第93号（81年12月23日）「転居広告」。
- 90) 『日出新聞』93年7月14日。

- 91) 前掲川合梁定自筆資料「経歴 年譜 附戸籍原本」。
- 92) 『京都新繁昌記』1903年（『新撰京都叢書』第8巻 臨川書店 1987年）。
- 93) 『京都美術協会雑誌』第124号（1902年10月28日）。
- 94) あらためて記すまでもないが小文の辞世のうちはじめの歌は西行，頼阿のつぎの歌を  
ふまえたもの。

ねがはくは花のもとにて春しなんその<sup>みさらぎ</sup>二月の<sup>ころ</sup>もち月の比 西行  
あとしめて見ぬ世の春を忍ぶかなそのきさらぎの花の下蔭 頼阿